



繰り返せ、繰り返せば

何事も身につく

●技能を修得するときにはいちばん重要なことは繰り返してである。稽古事はたいていこの繰り返して、はじめは「どうしてこんなに同じことばかりを……」と、いやになるほど繰り返しをさせられる。また経験を積むというのは、結局は繰り返しのことであろう。

●なぜ繰り返しがかくも重要なのか。技能や技術というものは、無意識に行える域に達して、はじめて修得したといえるからである。たとえば車の運転の諸動作をいちいち意識してやるのは初心者で、ベテランになるとすべてはほとんど無意識に行われる。

●そして、無意識の領域に達するには、繰り返してしかなないのである。ピアノの練習などはそのいい例で、どの順番でどの指を使ってどの鍵盤を叩くかなどと考えていたら、とても曲を弾けるようにはならないであろう。



●幼児は同じことを飽きもせずに繰り返す。また繰り返してくれようを要求する。繰り返しの効用を本能的に良く理解しているのは幼児のほうだ。だから幼児は大人が驚くスピードで様々な技能や知識を身につけていく。

●技能修得には四段階あって、無意識↓意識↓意識↓無意識という経路をたどる。最初の無意識は「できない領域」である。水泳を例にとれば、泳ぐことは夢にも考えないときである。第二段階の意識も「できない領域」である。『泳ぎたいが自分は泳げない』と思う時期である。第三段階の意識ではじめて「できる領域」になる。泳ぎを練習しはじめて少し泳げるようになる。『自分は泳げる』と自覚するようになる。しかし意識している点でまだ未熟である。第四段階の無意識も「できる領域」である。この段階になると泳げることすら自覚しない。泳げることは自分の一部になっていて、無意識だが泳げるのだ。



●このように技能の修得は無意識からはじまって無意識におわるが「できる領域」の無意識にまで達するには繰り返し以外に方法はないであろう。人はともすれば意識した「できる領域」で『自分は何々ができる』と思いがちだ。だが

その段階では未熟なのである。

●稽古事の挫折や中断の最大の理由は繰り返しの対する嫌悪である。意識の上ではやらなければと考えていても、感情がついていかないのである。だが人は好きなことの時は繰り返すという行為自体が心地よいのである。だから無意識に何回でも繰り返して、そして進歩するのである。

●受験勉強もこの技能修得に似たところがある。繰り返しの能力こそ偉大な才能であると思ったほうがよいであろう。(柳)

受験までの日々は、

これまでの倍の速さで

過ぎていく

—中学生も読みなさい!—

高校生も読みなさい!—

●九月である。そして受験生の大半は後悔しつつ二学期のスタートをきる。長い夏を予定通りに過ごせなかった。力がついていない気がする。不安な科目だらけ。あれもこれもまだやっていない。

●鈍感なキミも、自己流を変えようとしないうちにも、さすがにあせているだろう。それも当然。今のままでは間に合わなくなること明らかだから。あせり始めてからの時間の経過は速

い。八月までの倍のスピードで過ぎていくと思つたほうがよい。

●こう書きながら、私は別にキミの不安をおおっているのではない。あせり始めたキミだからこそ、やつと話を通じる訳で、これからのことを考える前に事実の確認をしたにすぎない。で、本題。

① 時間はまだまだあるし、作りだせる。高三生に「黄金の10分間」の話をするところがある。一日の中で10分間の単位を十五個以上作りなさいという指示をする。学校に行く前の10分、電車に乗っている10分、学校に着いて10分、授業前10分、昼休み10分、学校を出る前10分、電車で10分、塾に着いて10分、自習するとき科目と科目の間で10分×4、塾を出る前10分、電車で10分、家に着いて10分、寝る前に10分……。ここで何をするかといえば、英単語や英熟語、古文単語、英語の構文の読み直し、その他空き時間やれる暗記物。これらを全てすませしてしまう。そうすれば夕方からの「生命の五時間」が有効に使える。長文をやったり、数学の問題を解いたり、過去問を解いたり。10分ではできないことをやるのだ。



逆にいうと、夕方から「生命の五時間」に、「単語をやりました」「漢字練習をやりました」という人がいたら、それは哀れな受験生である。

② 過去問から逃げない。創学舎の中三生はずいと思ふ。夏から公立の過去問を解く。最初は三〇点とか四〇点。泣く生徒もいる。しかし定期的に続けるうちに、少しずつ点数が上がっていく。そして毎日の勉強がしまつてくる。そういう経験がない高二生は情けない。もつと力をつけてから。これとこれを終わらせてから。哀れである。これから戦っていく相手(志望校)の強さを知らないまま練習をしていても一生勝てない。九月は勇気を出して過去問に取り組む時である。

③ 解いた後の答え合わせ、解説の理解、解き直しが大事。ここで力がつくのに、答えあわせだけで終わる人も多い。全部やれば時間はかかるのは当然で、歯をくいしばって実行しなければならぬ。解説を理解することで力がつく。解き直しをすることで更に力がつく。面倒がらずに実行すること。

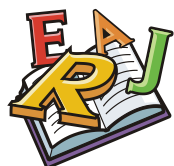
●まだまだ、時間はあるし、作れる。一日一日を大事に、目標に向かって頑張ろう。

(小林(健))

文字で伝える」といついつ

●「文字」は、「読む」と「書く」の二つの側面があり、内容を「残せる」という大きな特徴がある。私たちは、書物や新聞等を「読む」ことで、様々な情報や知識を得ることが出来る。「書く」ことについては、人に伝えるために書く場合と、自分が見返すために書く場合がある。特に人に伝えるときに書く文字は、相手に「提出」した段階で修正がきかないので、相手に誤解されないような文字を書く必要がある。

●宿題のノートチェック、小テストや模試の採点で、私が一番気になるのは「粗い字」である。宿題でそういった文字をみると、「学校や部活の後、疲れた中でやっているのかな」とか、「勉強に集中できていなかったのかな」と思いを巡らし、大体はその場で「もう少し丁寧に書こう」と伝えて終わる。しかし、模試の採点では点数に影響するだけあって頭を悩ます文字も少なくない。消しゴムできちんと消してから書いている、二度書き、カタカナ、アルファベット、数字も含め、文字が粗く他の文字に見えてしまったり判別しづらい……。そういった文字は三〇秒くらい〇にするか×にするか悩ん



で、断腸の思いで×にする。多分理解しているはずなのに本当に勿体ない。原因はいろいろあると思うが、自分の答案(考え)を「人に伝える」という意識をもって書いていないことが原因の一つだと思う。

●とは言っても、私も小学生の頃は、その時の気分や時間に追われて結構粗い字を書いていた。私は小学生の半ばで学校の先生に左利きを右利きに直してもらったので、「もともと左利きだから雑で当たり前」という意識があったと思う。私の先生も粗い文字を〇にするか×にするか悩んでいたのではないかと。そう思うと今更ながら申し訳ない。

●しかし、中学校の国語の先生は、黒板や返却されたノートの書き込みの文字が常にきれいで感動したのを今でも覚えている。それからきれいでなくともテストの時は丁寧に文字を書くように心がけようとした。しかし、丁寧に文字で書いていたら時間が足りない。また、テストだけ丁寧に書こうとしても、次のテストの時にはその意識がなくなっていることに気づく。



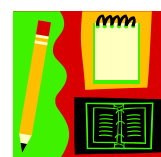
●結局、丁寧に文字というのは、毎日それを意識して書くことを積み重ねてやっと習得できる、時間を要するものだ。まずは誤解されない文字を書くということを毎日意識するところから始

めてみよう。返却された答案で文字に関する注意があったら、その文字は意識して書くように心がけてみよう。そして、鉛筆、シャープペン、消しゴムといった筆記具は、いつでも書き易い、消し易いといった状態を心がけよう。

●高校入試で君たちが提出する答案は、「あなたの高校に入学したい！」という意思表示だ。入試直前まで勉強してきたこと、入学したい思いを全てぶつける答案は、気迫があつて丁寧に書ければならない。採点者に自分の考えや思いが正しく伝わるように、誤解されない文字を書こう。まず、自分の名前を意識して丁寧に書こう。試験が始まる前に良い緊張感が生まれ、「よし、やるぞ！」という気持ちになる。これは私の試験時のおまじないだ。

●こういった機会は一度きりではない。大学入試、アルバイトするときに書く履歴書、就職するときの試験や自己PR、大事な人への手紙。君たちの文字で君たちの思いを伝える瞬間はまだこれから幾度も訪れる。

●私も授業の四五分間、見易く誤解されない文字を目指します。(本多)



▼▲継続希望の方へ▲▼

- ▶転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
- ▶在籍していた教室までご連絡下さい。